

乳幼児教育相談（けやきルーム）における保護者支援

～軽度・中等度難聴児に補聴器の装用を進めていく場合の配慮について～
林 徳子・山縣 浅日・杉山 砂寿・須藤 広代・中濟 珠実・山中 健二

けやきルームでは、近年、軽度・中等度難聴児とその保護者への支援数が増加してきている。軽度・中等度難聴児への早期補聴を進めていく時、子どもも保護者も生活の中で補聴器の必要性を実感する場面が少なく、安定した装用に時間がかかるケースが多い。そこで保護者の思いに寄り添うことと同時に、子どもの成長や発達の様子を丁寧に見て実態を把握し、個々の親子の状況に応じた手立てや配慮について検討してきた。本稿では、けやきルームにおいて、軽度・中等度難聴児と保護者に対する補聴器の常時装用に向けての取り組みについて報告する。

キー・ワード：乳幼児教育相談 保護者支援 補聴器 軽度・中等度難聴

1 はじめに

本校乳幼児教育相談（以下けやきルーム）では、初期の親子の愛着関係を形成していくための支援と早期に安定した補聴を進めていくための支援に重点を置いている。

安定した補聴のためには、補聴器や人工内耳（以下補聴機器）の装用に保護者が前向きに取り組めるようになることが何よりも大切である。担当者は、親子の楽しい関わりの中で補聴機器の装用が行えるように支援することを心がけている。また、個々の親子に応じた支援の手立てを全担当者で日々話し合いながら、グループ活動や個別指導、聴力測定等に当たっている。

けやきルームにおける軽度・中等度難聴児数の割合は、徐々に増加してきている。平成13年度には58名中12名の幼児が軽度・中等度難聴であったが、令和4年度には72名中40名になり、全体の半数以上を占めている。

軽度・中等度難聴児の場合、早期に適切な補聴が必要とされているものの、補聴器が常時装用出来るようになるまでに時間がかかるケースが多い。裸耳の状態でも何らかの聞こえの反応が得られることが多く、保護者からは、今の生活の中で補聴の必要性を感じないという声も度々聞かれる。保護者が前向きに補聴器装用を進めていけるように、長期的、段階的に寄り添い支えていく必要がある。

本稿では、軽度・中等度難聴児とその保護者に対

する補聴器の常時装用に向けた支援の取り組みについて報告する。

2 研究の目的

乳幼児期の保護者支援として、軽度・中等度難聴児の補聴器の装用を進めていく場合の配慮について、担当者が子どもや保護者への関わりで気を付けていることやそのねらいについてまとめる。

3 けやきルームにおける補聴に関する基本的な取り組み（令和5年度）

（1）登校後、補聴器や人工内耳の点検を行う

常に良い状態で音が届くようにするため、登校後すぐに、各担当者が補聴機器の点検を行っている。例えば、電池の残量チェック、実際に音を聞いてのチェック、イヤモールドやチューブの状態のチェック等である。

担当者が毎回保護者と一緒に点検をしながら、家庭でも点検や手入れが習慣化出来るように支援している。特に補聴機器を装用して間もない時期の保護者に対しては、担当者が伝えたことが正しく伝わっているか確かめながら進めていくようにしている。

補聴機器の装用に慣れてきたように感じられる保護者であっても、忙しい生活の中で抜け落ちてしまうことも多々ある。グループ活動や個別指導の度に声をかけることで意識してもらうようにしている。

乳幼児期は、自分で聞こえの変化を訴えられない

14 乳幼児教育相談（けやきルーム）における保護者支援

ことや、特に何でも口に入れてしまう時期は、補聴器やイヤモールドをすぐになめたりかじったりすること等から、十分な乾燥や拭き取り、毎日の音のチェックが欠かせない。

また、耳垢がイヤモールドに詰まりやすく、音が出なくなるケースもよくあるため、イヤモールドの手入れと同時に、定期的に耳垢をとってもらったり、すぐに耳の中の状態を見てもらったり出来る近隣のかかりつけの耳鼻科を見つけるようアドバイスすることもある。補聴器の点検の習慣を通して、日々、保護者が、子どもの耳の状態や聞こえの状態の何に気をつけて見ていけば良いかわかるように伝えることを心がけている。

軽度・中等度難聴児の保護者の中には、気持ちの上で、補聴器そのものの受け入れが難しい場合も多い。補聴器を取り出す気持ちになれず、持ち運び用のケースに、補聴器が一週間入れっぱなしになっているようなこともよくある。イヤモールドが変形してしまったり、電池残量がない状態であったりと、装用に支障が出ることもある。保護者が、補聴器をつけてみようと思えた時に、良い状態で補聴器が作動しているようにすることも大事な支援の一つと捉え、毎回の支援にあたっている。

（２）グループ活動や個別指導等の中で装用の状態を観察する

グループ活動や個別指導の中での、やりとりの場面や子どもが遊んでいる様子等から、装用の様子を細かく観察して実態把握をしている。補聴器の装用を進めていく時には、子どもが安心して楽しく遊べる環境が欠かせない。担当者は、グループ活動や個別指導で一緒に楽しく遊びながら、常に子どもの声の出し方や声をかけた時の応じ方、気づき方等を観察し把握するようにしている。そうすることでいつもと違う様子もつかみやすくなり、速やかに対応することが出来る。

（３）０歳児、１歳児、２歳児それぞれに、補聴担当を決め、聴力測定及び補聴器の調整を行う

けやきルームでは、グループ活動の担当者として聴力測定や補聴器の調整を行う担当者を年齢ごとに決めている。グループ担当と補聴担当が連携を図りなが

ら、子ども一人ひとりの補聴についてきめ細かく検討していく体制をとっている。それによって複数の担当者の視点で補聴に関する検討が出来る。

（４）保護者から提出される「週の記録」から、聞こえに関する内容を担当者間で報告し合う

毎週保護者から提出される「週の記録」から、聞こえに関する内容を担当者間で報告し合い、情報を共有している。担当者間で同じ情報が共有できていることによって、複数の担当者の目で子どもの装用状態を見ることが出来る。また、「どんな時に補聴器をつけていられたのか」「どんな音に気付いたのか」「ママの顔を見ながら補聴器を外している」等の記述から家庭での様子も実態把握の参考にしている。

（５）医療機関との連携を図る

医療機関との連携を図り、子どもの様子や聴力測定の結果をやりとりしたり、補聴に関する助言を受けたりしている。保護者を介して、本校での聴力測定結果やけやきルームでの子どものきこえの様子や活動の様子を伝えてもらい情報共有する。耳鼻咽喉科医師からは補聴に関する指示や助言を受けたり、ABR、ASSR、COR等の結果から、初期の調整を行い、その後、段階的に出力を調整したりする。

軽度・中等度難聴児の場合、生活の中で何らかの聞こえの反応が得られるので、保護者も聞こえにくさの実感がもてない中で、医療機関での精査の診断に至る。難聴や補聴器の装用を受け入れられない状態が比較的長く続くことが多く、「家では聞こえていると言っても病院では聞いてもらえない。」等と保護者が不安を口にすることもある。必要に応じて、保護者の了解を得て耳鼻咽喉科医師や担当のSTと電話で連絡したり直接伺ったりして、子どもの聞こえの様子や保護者支援の状況について情報共有を図るようにしている。

それによって、医療機関では保護者に対してどのような経緯や考えで情報提供をしているかを知ることが出来る。同時に、けやきルームでの具体的な親子支援の様子を医療機関に伝えることで、双方の理解が深まり、速やかな支援や保護者の安心感につながっている。

4 担当者間での話し合いと取り組みの方法

- ・担当者が、日頃、軽度・中等度難聴児と保護者の支援をする時に課題と感じていることを出し合う。
- ・担当者間で出された課題について、実際の子どもや保護者の様子を基に、担当者が課題と感じる事柄が生じるのはなぜか、どのような配慮や手立てが必要かを話し合い、実践に生かす。
- ・実践の経過を話し合い、配慮や手立てについて再確認したり、修正したりする。

5 話し合いと取り組みの実際

(1) 担当者間で話し合われた支援上の課題

- ・補聴器の装用習慣がつかない。
- ・本人も保護者も日常生活の中で聞こえにくさを実感していない。
- ・補聴器をつけずに登校する。担当者が声をかけるまでしまっている。
- ・子どもが補聴器を外してしまうと保護者がすぐにケースにしまってしまう。
- ・保護者が補聴器をつけようとする子どもが頭を振ったり、逃げたりしてつけられない。

(2) 取り組みの実際

【子どもが補聴器をつけたがらない場合の具体的な手立て】

1歳児や2歳児は、装用の違和感やイヤイヤ期等から、補聴器の装用を嫌がったり、すぐに外したりすることがある。また、身近な大人が大事に扱っている補聴器に興味をもって外すこともある。0歳児は、耳元に手が届くようになってくると手近なおもちゃとして補聴器を引っ張り、なめたりかじったりする。

装用習慣をつけていくためには、生活や遊びの中で、身近な大人が楽しくかかわりながら根気よく補聴器をつけていくことが必要になる。また補聴器をつける際には、耳に触れられたり、頭を支えられたりしても安心して身体を預けられる信頼関係作りが何よりも大切になる。家庭で全く装用ができない場合は、当面のねらいとして、けやきルームで装用出来る場面を増やすことから始める。担当者は、子どもとの関係作りをベースにしなが、以下のような

ねらいで、個に応じた手立てを考えていく。

○ねらい

活動中なら、装用して過ごせるようになる。

○支援の基本になること

子どもと担当者との関係作りを十分に作る。

○子どもの実態を踏まえた目指す子どもの姿 目指す子どもの姿①

- ・活動中に、なじみのある担当者に補聴器をつけてもらえばごく短時間でも過ごせる。

目指す子どもの姿②

- ・活動中に、なじみのある担当者ならば、補聴器をつけ直されても気にせず過ごせる。

目指す子どもの姿③

- ・なじみのある担当者ならば、補聴器をつけてもらったり、つけ直してもらったりすることに慣れる。ごく短時間であっても保護者につけてもらって過ごせることが出てくる。

目指す子どもの姿④

- ・活動中なら、担当者や保護者等の身近な大人に補聴器をつけてもらって過ごせる時間が長くなる。

目指す子どもの姿を基に、個に応じた手立てや配慮を話し合い実践していく。

目指す子どもの姿①②③④の実践例

- ・身体を使って楽しく触れ合って遊ぶ。触れ合うことで、人との関わりの心地よさ、安心感を十分に感じられるようにする。(①②)
- ・楽しく遊べるようになってきたら、担当者は遊びながら補聴器を手早くつけてみる。つけたらすぐに一緒に手遊びをしたり、両手におもちゃを持たせて一緒に遊んだりして、子どもが補聴器を気にし過ぎないように過ごす。(①②)
- ・子どもが補聴器を外しても、止めたり叱ったりしないですぐに受け取るようにする。自分が補聴器を外すと、周囲の大人が慌てて近づいてきたり、関わりを持ってきたりすることがわかると、子どもは大人の顔を見ながらわざと外すことがある。担当者はさっと受け取り、また楽しく遊び、関係

作りをしていく。(①②)

- ・遊びながら様子を見計らって、再度、補聴器をつける。(①)
- ・子どもが補聴器を外したらすぐにつけ直す。(②)
- ・担当者が補聴器をつけ直す時に、片方を保護者につけ直してもらうところから始める。徐々につけ直しは担当者から保護者に代われるようにしていく。保護者の取り組みを励ましたり、褒めたりする。(③)
- ・子どもが外しても、保護者が自信をもってつけ直せるように、担当者は随時見守り、必要に応じて声をかけるようにする。(③④)
- ・担当以外の教員も積極的につけ直しや装用に関わるようにする。(④)

【保護者支援の具体的な手立て】

手立て①保護者の気持ちをよく聞き取る

担当者は、保護者が安心して何でも話せるような雰囲気を作り、保護者の気持ちをよく聞き取るようにする。保護者にとっては、難聴の診断を受け、気持ちが整理できないうちに補聴器の申請や購入手続きが先に進んでいってしまうことになる。医師から聞こえや補聴器に関する説明を受けていても、不安な気持ちと難聴に関する情報量の多さから、内容が正しく受け取れていないことがよくある。「子どもが自然に補聴器をつけると言ってくるまで待ちたい。」「補聴器をつけないと言語に影響が出るといわれたが、今は何も影響を感じないのになぜ必要なのか。」「何歳になったら補聴器は外せるのか。」等、様々な思いや不安が次々に出てくる時期は、難聴や補聴器に対するその時の保護者の思いに十分に寄り添いながら話を聞くことから始める。

静かな環境や慣れた家の中では聞こえにくさを実感することがないという保護者の気持ちを共感的に受け止めつつも、今後成長と共に配慮が必要になること、現在の補聴が後の言語習得にどのように関わってくるのか等、保護者が前向きに子育てに向かえるように、出来るだけ具体的な例を挙げながら伝えていく時期の見極めも大切である。

手立て②家庭での生活の流れの中で、いつ、どの場面で補聴器をつけて過ごしやすいかを保護者と一緒に見つける

補聴器を装用していく上で、「忙しくてなかなかできない。」「時間がないからつけられない。」という話をよく聞く。保護者にも様々な思いがあつてのことではある。話をよく聞きながら、食事、テレビ、散歩、買い物等、個々の状況に応じて、生活の様子を出来るだけたくさん聞き取る。その上で装用に繋がる場面を保護者と一緒に見つけていくようにする。最初は一場面、数分でも良いので、保護者が「出来そう、やってみよう。」と思えることから始める。やり切れたという自信が次の装用場面に繋がっていく。担当者は、根気強くかわわりを続けていくことが大切である。

手立て③補聴の効果によって子どもの興味や関心が広がることを伝える

聴力測定をすると、保護者はその数値に一喜一憂する。「今日こそ補聴器がいらなくなるのではないか。」という思いで聴力測定の結果を聞く保護者もいる。「また聞こえないといわれるのだろう。」「生活の中では困っていない。」「家ではちゃんと言うことがわかっているから大丈夫。」と身構える保護者も多い。

聴力測定をし、結果の説明をする時に、以下のようことを伝えるようにしている。

- ・装用閾値と裸耳聴力に差がみられること
- ・補聴器を装用した時の方が早く気がつくこと
- ・聞こえない所を聞こえるようにするだけでなく、今聞こえている部分も補聴によって楽に聞けるようになる。子どもの生活にとって様々な興味や関心の広がりにもつながること

大切なのは聞こえているかどうかではなく、補聴器を装用することで聞きやすくなり、子どもの気づきや興味が広がってくることでであると伝えるようにする。

医療機関での聴力検査とは異なり、教育機関の聴力測定だからこそ、保護者が子どもそのものの成長の姿に目が向けられるような機会としたいと考えている。

手立て④子どもの聞こえのイメージを伝える

話しかけられている声は聞こえても細かい部分が聞き取りにくい子どもの伝わりにくさや聞きとりにくさのイメージを保護者がもてるようにする。担当者自身の声の大きさやオーディオメーターでの実際の音の大きさを基に、子どものきこえ方について知ってもらう。オーディオグラムの結果を見て、この数値は聞きとれる最小の音であり、言葉として聞きとるにはどれくらい大きさの声やどんな音環境が良いのか等、個別指導の時間を使い、保護者の疑問に答えながら進めている。

また、けやきルームでは、日中保育園で過ごしている子どもが増えてきている。保護者と直接話したり、連絡帳等でよく関わったりしている保育士に対しても、子どもの聞こえについて知ってもらうことが大切である。けやきルームで実施している保育園訪問や保育士の勉強会の中で、実際に軽度・中等度難聴児と関わっている保育士から「難聴と聞いているが、どれくらい聞こえているのかよくわからない。こちらの言うことも分かってできていると思うのだけれど。言ったことがよくわからないのはどの子どもも同じなので判断が難しい。」といった質問がたくさん出てくる。日常子どもたちが通っている保育所とも連携をとり、軽度・中等度難聴のきこえについて理解を深めてもらうようにしている。

保育園との連携を密にとっていくことで、子どもへの関わりについての支援に繋がることはもちろんのこと、保護者にとっても、我が子の難聴を理解してくれる場が広がっていくことへの安心感につながっている。

6 まとめ

軽度・中等度難聴児とその保護者への支援を進めていく時、保護者が親子の楽しい関わりの中で補聴機器の装用に前向きに取り組めるようにしていくことが大切である。担当者は、軽度・中等度難聴ならではの保護者の悩みや思いに寄り添うことと同時に、子どもの成長や発達の様子を丁寧に見て実態把握をし、個々の親子の状況に応じた手立てや配慮について検討する視点が必要になると考える。今後も保護

者の思いに寄り添いつつ、子どもの成長や発達の様子を丁寧に掴み、保護者と一緒に話し合いながら、親子の状況に応じた支援を考えていきたい。

〔付記〕

本研究は、筑波大学附属聴覚特別支援学校研究倫理審査委員会の承認を受けて実施されたものである。

〔参考文献〕

林徳子・山縣浅日・杉山砂寿・佐藤文昭・山中健二
(2023) 乳幼児教育相談における保護者支援～補聴器や人工内耳の装用や聴力測定場面での配慮～
筑波大学附属聴覚特別支援学校紀要、45、23-28.

